

インディアン日本をめざす

内藤 誠



内藤誠

インディアン日本をめざす



小峰書店

著者紹介

内藤誠（ないとう・まこと）一九三六年愛知県に生まれる。早稲田大学政経学部卒業後、一九五九年東映演出部に入社。脚本、監督をし現在にいたる。児童映画作品『中学時代』もある。

現住所 東京都豊島区

長崎三一二三七・四一〇
秀和椎名町レジデンス

多田佳人（ただ・よしひと）一九四九年兵庫県養父郡養父町に生まれる。一九七一年阿佐谷美術学園卒業。現在、天象儀工房代表。
現住所 東京都足立区足立四一二・三三

NDC 913

インディアン日本をめざす

昭和五十二年十一月三十日 第一刷発行

昭和五十三年 六月三十日 第二刷発行

著者 内藤 誠（ないとう まこと）

発行者 小峰 広恵

発行所 株式会社 小峰書店

東京都新宿区舟町六 千一六〇

電話〇三三三七・三三二 振替東京一〇九五四

組 版 国際文化交易株式会社

本文印刷 株式会社 厚德社

表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

製 本 小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに表示してあります

内藤誠

インディアン日本をめざす



小峰書店

はじめに

十九世紀のなかばごろ、ラナルド・マクドナルドというアメリカ・インディアン
血をひく若^{わか}ものが、あることのため、どうしてもアメリカから日本へわたりたいと思
いました。そして、若ものは捕鯨船^{はげいせん}にのりこみ、いろいろな困難にも打ち勝^かって、徳^{とく}
川幕府末期^{がわばくふきまつき}の日本へたどりつきました。

まず、めぐりあつたえぞ地のアイヌ人たちはとてもやさしく彼をもてなしてくれま
したが、なんといつても当時の日本は「鎖国^{さこく}」です。たちまち、幕府のおきてどおり、
若ものは長崎へ送られ、アメリカ本国から救いの手がさしのべられる日まで、囚人生^{しゅうじんせい}
活^{かつ}を送らねばなりませんでした。

しかし、そこで、ラナルド・マクドナルドは日本最初の英語教師となり、英和辞典^{じてん}
をつくり、さらに、民主主義というものを日本人に理解させようと努力したのです。

ラナルドの門下から、その後、ペリーの黒船がきたときの主席通詞、森山栄之助などの人材が多く出ました――。

これは、ほんとうにあったことをもとに、私の想像をまじえて書いた小説です。

さて、みなさんは、かつての日本にいろんなことをもたらし、これからも考えさせることの多いはずのラナルド・マクドナルドという人を知っていましたか？

この人物については、徳富猪一郎の『近世日本国民史』や、大隈重信の『開国大勢史』といった有名な本にも、ちゃんと書かれているのですが、実は私だって、よく知らなかったのです。もし学生時代に、木村毅先生のもとでアルバイトをさせていたかどうかという、よい星にめぐりあわせなかったら、私もラナルド・マクドナルドのことを調べて、本に書いてみようという気にはならなかったでしょう。そして、この小説を最後まで読んでいただければ、ラナルドのような人間が、ふつうの歴史の本には大きく書かれなかった理由もわかってもらえるはずです。また、アメリカ・インディアン（白人がつけたそのことば自体、すでにおかしいのですが、この本では話をわかりやすくするために、あえて使いました）とはなにか、ということも考えていただけるよ

うになると思います。

アメリカ・インディアンのあるものは、一生に一度、みずからの立つ世界をたしめるため、旅に出るといいます。帰ってくるるときその胸には秘密の名まえと歌と守り神が、しつかりぎざまれているそうです。

ラナルドは十九世紀の世界を冒険したあげく、なにをつかんだでしょうか？

私は木村先生からお借りした、ラナルド・マクドナルドの回想録をもとにこの本を書きながら、いまの私からみると、ああ、こんなことをしなければよいのに、こんなことをいわなければよいのに、と思ったところも、いくつかありました。が、あえて筆をひかえるようなことはしませんでした。

現代を生きる私たちだって、とらわれた思想をもち、別な意味の「鎖国」状態にないとはいえません。

ただ私は、その時代の限界の中でも、時代の壁をつき破ろうとして、力いっぱい生きた人たちには、心からの声援を送りました。

目次

はじめに／ 3

黒船と慧星^{コメット}…………… 11

インディアンの血…………… 22

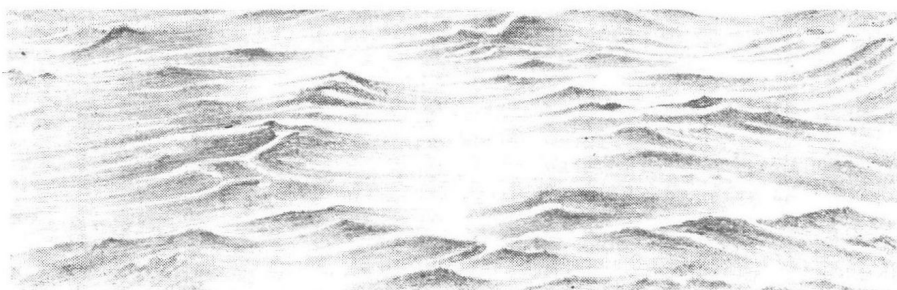
はるかなる母の地…………… 38

捕鯨船^{ほげいせん}で日本へ…………… 58

さいはての島に…………… 79

えぞ地から本州へ…………… 98

長崎村大悲庵^{ながさきむらだいひあん}…………… 135



鳥かごの人……………	143
日本最初の英語教師……………	164
日米最初の握手……………	192
別れと民主主義……………	208
ハッピー・エンド……………	219

あとがき／
225

装幀・さし絵 多田佳人



インディアン日本をめざす

黒船と彗星^{コメット}

そのとき、働きざかりの男たちが漁に出てしまったあとの浦賀^{うらが}の村は、一瞬^{いつしゅん}、時が止まったように静まりかえり、ただ、真夏の太陽だけがぎらぎらと照りつけているのでした。

老人たちは浜辺^{はまべ}で魚をとる網^{あみ}をつくろい、女たちはおけで水運びをしたり、子どもを周囲で遊ばせながら裏の畑で野菜の手入れをしたりしていました。

村の前にひろがる湾^{わん}には、小型漁船が波の上を静かにすべってゆきます。

そんなとき、あの黒い大きな船団が水平線の上にぬっと姿^{すがた}をあらわしたのです。

それは、二百年あまりの長い日本の鎖国^{さこく}をやぶることになるアメリカの艦隊^{かんたい}で、マツシュー・ガルブレイス・ペリー提督^{ていとく}ののる旗艦^{きかん}サスケハナにミシシッピー、プリ

マス、サラトガと続いています。

ときに嘉永六年（一八五三年）六月三日。

ペリー提督の旗艦のマスストには、星条旗が誇らしげにひるがえっています。

その旗は、それから九十二年のち、太平洋戦争終結の調印式がおこなわれたミズリ
ー号にもかざられる運命にありました。

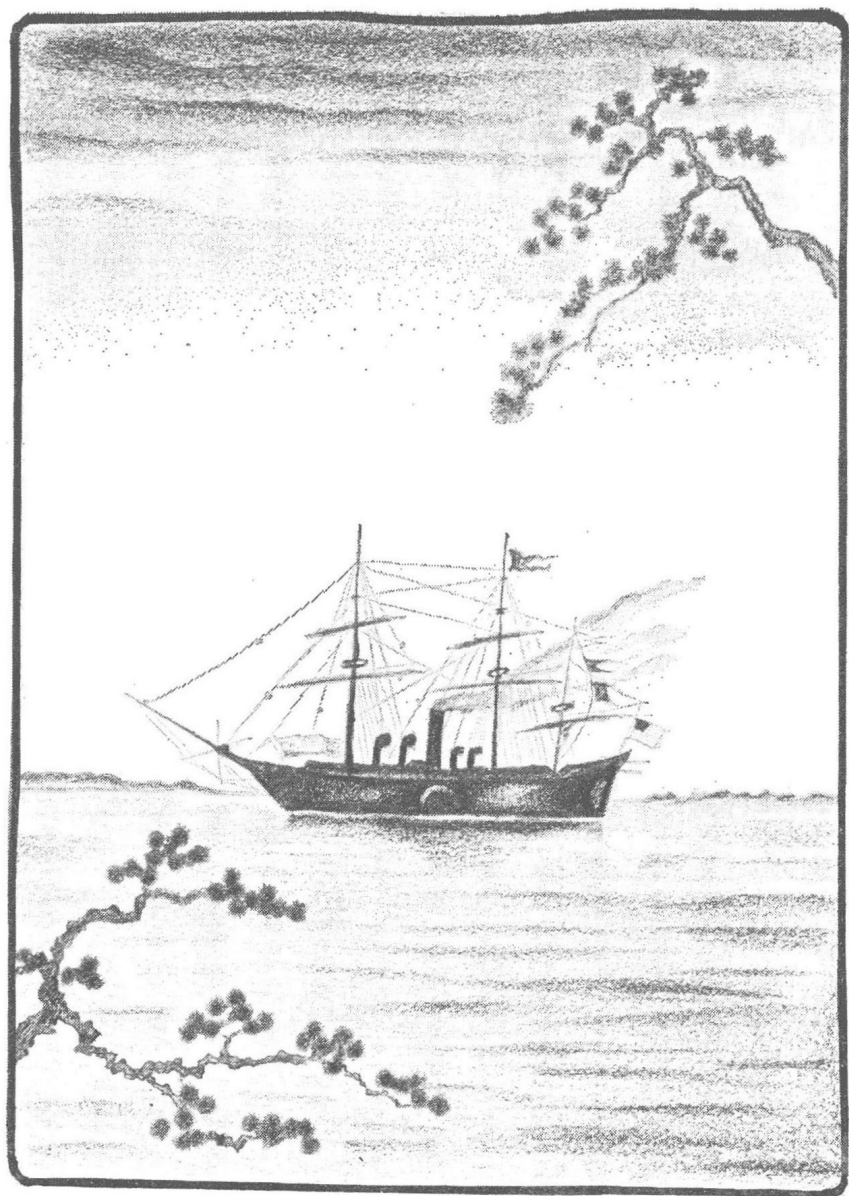
漁師たちのあわてぶりは、たいへんなもの。風をはらんだ帆をあわてておろす。帆
は船の上でしわくちやのかたまりになる。それにもかまわず、漁師たちは、急いで網
をひきあげ、くるったように岸をめざして櫓をこぎました。

「それは、あたかも、突然おそいかかる獵師におどろいてにげる野鳥のごとくであっ
た」

『ペリー提督遠征記』の編者、フランシス・ホークスはそう書いています。

「夷狄襲来！ 外国人がせめてきたぞ！」

岸でも大騒動がおきていました。寺の鐘が危険を知らせ、住民は家のなかににげこ



み、雨戸をかたくとぎしました。

村の役人は堤防に走り、黒いバケモノどもが近づいてくるのを、おびえた表情で見つめます。

浦賀の沖あいおよそ一マイルのところで、艦隊は一発ドカンと発砲し、イカリをおろしました。

やがて、夜になると、役人は村人たちに命じて浜辺に火をたかせました。

江戸でも火の見やぐらという火の見やぐらに人々が鈴なりになりました。そして、首をのばして暗い海のかなたに目をやるのでした。

どの寺も老婆たちの念仏をとなえる声であふれました。

うわさがうわさと呼び、すぐにもいくさがはじまるというデマがひろがりました。

軍馬の重い足音、火消しのそうぞうしい声、寺の早鐘、女、子どもの悲鳴、江戸百万の庶民が不安と恐怖につつまれているのです。

「それで、そのアメリカ人は、日本へきて、どうしようというんだらう？」

「アメリカも、オランダとおなじように、日本とまじわりをしたいという、考えのよ